

二 粉 碎 学

石原が、東京医科歯科大学の教員となって最初に着手したのは、咀嚼能率の研究であった。蒲郡から上京して補綴の研究室に顔を出すなり、「粉碎学をやる」と目を輝かせて教室員に語った。⁽¹⁾ ピーナッツや生米を粉碎させて、入れ歯の咀嚼能力を測る試みをこう呼んでいるのだった。

補綴の研究室は、大学の本館の地下にあつて、教室員は「潜水艦」と呼んでいた。

石原は、学生の実習でも臨床でも、「で、この処置で能力は回復したと思えますか」「どうして能力が回復したと言えるんですか」とつねに熱を込めて話した。技術的なことでも疑問があると、「ちよつと、君の考えを教えてください」と声をかける。そして静かに聞いていて、心から「ありがとう、ありがとう」と丁寧に感謝の言葉を述べる。訥々として礼儀正しいのだが、胸襟きょうきんを開いて人の話を熱心に聞くものだから、自然と石原のまわりに

(1) 高野鉄男：ジャパニーズ・マンリー 石原寿郎先生を想う。東京医科歯科大学十六回生二十周年記念誌、同編集委員会発行、東京、1970。

議論の輪ができた。若い教室員は、その潜水艦の中で石原を囲んで、暇さえあれば議論をした。

悪くなった歯に金冠ゴールドクラウンをかぶせて回復したり、失った歯を固定性の入れ歯（ブリッジ）で補うのが、この教室の専門分野だったが、石原ははっきりと学問としての補綴学の目標を明言した。

「咀嚼能力の回復向上は、歯学終局の目的として第一に挙げられるべきもので、殊に補綴学に於いてはその重要性が昔より繰り返し強調されている。」²⁾

入れ歯を装着しておしまいでなく、かめるところまで責任をもつ、補綴処置にとどまらず、咀嚼能力の回復が第一義なのである。咀嚼能力の回復を目的にする以上、咀嚼能力の評価をしなければならぬ。悪い状態を客観的に評価しなければならぬし、回復したというならそれを評価しなければならぬ。負担をより少なく、回復をより多くするため、研究をする。基礎的な研究の場合には、その焦点距離がぐんと伸びるが、目的は同じだ。石原の研究の目的は明確だった。

補綴治療は治療結果の具合のいい悪いが患者にわかる。患者が治療結果をそれなりに判断できるために、あえて施術者が、結果を評価する必要がない。通常、医療技術は、その

(2) 石原寿郎：篩分法による咀嚼効率の研究。口病誌, 22(4): 207-255, 1955.

成績を評価することによって改良され発達するものだが、補綴の場合には評価学が弱い。評価学が弱いものだから、たとえば歯のかみ合う面をどのようなかたちにすべきかと考えるとき、臨床評価ではなく伝承や経験あるいは古くからの理論に従わざるを得ない。これでは学問にならない。このために、石原は、何はさておいて、まず咀嚼能率評価の実証研究に着手した。

複数の治療の有効性は、比較しなければ優劣は分からない。比較するには、比較の測定器（メジャー）がなければならぬ。しかし、そこには困難があった。

このものがたりでは、古い雑誌の記事、学術論文はもちろんだが、座談記事の中から文章を切り取って使う。石原が補綴学を根本のところまでどう捉えていたか、もっとも古い座談記事から、うかがうことができる。

「補綴が一つの科学として成り立って行くためには、他の分科と同じように実証的でなければならぬ。これは当然であります。補綴という分野は、その仕事の性質が非常に特殊であって、いわゆる歯科医学の中の生物学的なものからは一寸離れた存在だと、思われるのです。考えてみると補綴ほど色々な意見の対立があって論争しあって…。色々な説が

あっても、実験的に説明されたことは少ないようです。…どのような補綴物が機能的に良いかということを実証することが非常に難しい。」⁽³⁾

実証が難しいというこの石原の発言は、昭和二八年の歯科雑誌に掲載された座談会⁽³⁾でのものであるが、石原はこの当時、マンリーら (R.S. Manly et al.)⁽⁴⁾ が咀嚼能率に影響を及ぼす要素について詳しい測定を行っていることを紹介している。咀嚼能率は機能評価の一部に過ぎないが、まず実証的に評価しやすいところから着手したのである。石原も、マンリーらの方法に倣って、ピーナッツや生米をかねて、それを呑み込まずに吐き出して篩^{ふるい}にかけて計測するという方法を使った咀嚼能率の実証研究に取り組む。ずいぶん原始的な試験方法にみえるが、「食べる」という評価法を採り入れたところに実証研究としての価値があった。

この座談の二年後に「篩分法による咀嚼効率の研究」⁽²⁾が、まとまる。これは、検査の妥当性から始まり補綴の種類による咀嚼能率を比較して客観的な結論を出すところまで四九ページに及ぶ大論文だが、このとき石原は、「補綴物の細部の構造について、咀嚼能率を比較し客観的な結論を出す」ことを遠望していたので、その道筋を考えると最初の手がかりを得たに過ぎない。

(3) 高橋新次郎, 山下浩, 渡邊義男, 石原寿郎, 大西正男, 石川梧郎: 座談會 現代歯科醫學の嚙み (一)あすへの希望. 齒界展望, 10(3): 83-90, 1953.

(4) Manly, R.S., Braley, L.C.: Masticatory performance and efficiency. J. Dent. Res. 29: 448-461, 1950.